

SORAism company 大千穠楽公演

『夕暮れラブソディ』

脚本
塩澤
剛史

◇主な登場人物

四月一日 岬(わたぬき みさき)・・・カフェ店員
星 涼太(ほし りょうた)・・・岬の彼氏。事故で死亡

珍 竹林(ちん ちくりん)・・・カフェの店長

大久保 青葉(おおくぼ あおば)・・・カフェ店員

上原 環(うえはら たまき)・・・カフェの新人店員

前田 薫(まえだ かおる)・・・大学3年生

二見 小和(ふたみ こより)・・・大学3年生

加藤 陽人(かとう はると)・・・サラリーマン

如月 一之進(きさらぎ いちのしん)・・・ラノベ作家
シェリー・・・振付師

かんちゃん・・・死神

ようちゃん・・・妖怪

プロローグ

夕暮れのビルの屋上。岬が一人たたずんでいる。

岬「涼太・・・」

ようちゃんが登場。

よう「なにしてんの？」

岬が振り向く。

よう「死ぬんやろ？」

岬が目線をそらす。

よう「夕暮れに、ビルの屋上に女が一人。自殺しかないやん？」

ようちゃんが岬に近づく。

よう「どうせ死ぬんやったらその魂、わしにくれへんかな？」

岬の顔を覗き込み。

よう「わしか？わしは妖怪や・・・お前が魂をくれたら、わしがお前の願いを一つ叶えたるわ」

岬「願いを・・・」

OP

一場

場所は都内にあるカフェ「トワイライト」の店内。上手奥に外からの入り口があり下手奥にキッチン等へ続く扉がある。下手側に3人掛けの丸テーブルが一台あり薫がテーブルに項垂れていて小和が座って小説を読んでいる。センター奥に2人掛けのテーブルが一台ありかんちゃんが座っている。それぞれのテーブルにはコーヒーカーップが置いてある。照明が入ると、上手前で青葉がメニューを持って環に新人教育をしおり竹林が下手奥でそれを見ている。

青葉「上原さん。とりあえず、メニューを覚えるところからね」

環「はい！つて結構ありますね・・・」

青葉「直ぐに覚えられるわよ」

環「暗記がちょー苦手なんですよ。高校でも英語と社会と数学と国語と理科が苦手でした」
青葉「それ、全部じゃない・・・」

竹林が近づいてきて。

竹林「上原！がんばれ！」

環「はい！店長！」

竹林「うるさいよ」

環「すみません」

竹林「このカフェトワイライトは静かな憩いの場！」

青葉「それとうちは常連さんが多いから顔覚えてね」

環「また覚えるんですか〜」

奥で食器が割れる音がする。

竹林「あいや〜」

青葉「失礼しました」

竹林が下手奥に退場。

青葉「あそこの二人は近くの大学の学生さんで岬の後輩」

環「そうなんです。あの、青葉さん。あの人も常連さんですか？」

青葉「あの人は今日が初めてじゃないかな」

環「わかりました！」

青葉「とりあえず、二人に挨拶にいきましょう」

環「はい！」

青葉と環が薫と小和のところへいく。

青葉「薫さん、小和さん、ちょっといいですか？」

小和「はい」

青葉「この子、今日から入った新人なんです」

環「上原環です。よろしくお願いします」

小和「二見小和です。よろしく。で、このへこんでるのが前田薫」

青葉「薫さん、どうしたんですか？」

小和「それがねく・・・」

薫「急に起き上がってくっそー！ぜってー後悔させてやる！」

小和「彼氏にフラれたのよ」

青葉「またですか・・・」

薫「フラれたんじゃない！私がふったの！」

小和「でも、浮気されてたんでしょ？」

薫「あー思い出しただけでも腹が立つ！」

青葉「また次の彼氏を探せばいいじゃないですか」

薫「青葉さん！」

青葉「は、はい！」

薫「そうよね！過去の男のことなんて忘れて次いこ次！」

小和「でも、好きだったんでしょ？」

薫が泣きながら机に倒れこむ。

小和「気にしないでください。いつものことなので」

青葉「はあ」

上手から陽人が登場。

陽人「岬さーん！」

青葉「いらっしやいませ」

陽人「岬さんいる？」

青葉「今、呼んできますね。あ、この人も常連さんの加藤さん」

陽人「新人さん？」

環「上原環です。よろしくお願いします」

陽人「加藤陽人です」

青葉「直ぐに呼んできますね。上原さんも来て」

環「はい」

青葉と環が下手に退場。上手からシェリーが登場。

シェリー「どうもー。あれ？誰もいないの？」

陽人「あ！シェリーさん。こんにちは」

シェリー「どうも。こんな昼間からさぼり？」

陽人「営業の帰りです」

下手から岬が登場。

岬「お待たせしました。あ、シェリーさん。いらっしやいませ！」

シェリー「どうも」

陽人「岬さん！ホット一つ！持ち帰りです」

岬「ありがとうございます」

シェリー「私も持ち帰りでアイスコーヒー」

岬「はい」

シェリー「25個」

岬「え！一人で飲むんですか？」

シェリー「飲むわけではないですよ。今日はスタジオで振付してるからその人たちの分よ」

岬「なるほど！びっくりしました！」

シェリー「こっちのほうがびっくりしたわよ」

陽人「でも、シェリーさんなら一人で25杯いけそうですね」

シェリー「ぶん殴るわよ」

岬「じゃー作ってきますので、お待ちください」

陽人「はい！」

かん「すみません。お勘定を」

岬「はい。450円です」

かん「ここに」

テーブルにお金を置く。岬が近づくとサスになる。

かん「あなた、狙われてますよ」

岬「え……」

明かりが戻り、かんちゃんが上手に退場。

陽人「岬さん、どうしたの？」

岬「いえ……直ぐにご用意しますね」

陽人「よろしく」

岬が下手に退場。

陽人「君たちもきてたのか」

小和「どうも」

陽人「前田さん、どうしたの？」

小和「面倒なので触れない方がいいですよ」

陽人「そうなんだ・・・」

薫「急に起き上がり）加藤さん！」

陽人「うわっ！びっくりした！」

薫「岬先輩に関してのいい情報がありますぜ」

小和「ちよつとやめなよ」

陽人「ほほう。聞こうじゃないか」

薫「（手でお金の形をして）これ」

陽人「よし。このコーヒーをおごろう」

薫と陽人が握手をする。

小和「もう」

シェリー「なにになに？」

薫「噂なんですけど、一週間前に岬先輩の彼氏が事故で死んじゃったらしいんですよ」

陽人「え・・・」

薫「で、岬先輩、相当落ち込んでるみたいで・・・」

陽人「そうなんだ・・・」

薫「なんで落ち込んでるんですか。これはチャンスですよ！」

陽人「いや、でも・・・」

薫「ここで優しくしてあげれば、岬先輩はコロッといきますよ」

陽人「それは卑怯というか・・・」

シェリー「馬鹿ね。男と女なんて駆け引きよ、か・け・ひ・き」

陽人「そんなものですか？」

上手から如月が登場。

如月「あら、みなさんお揃いで」

陽人「如月さん、こんにちは」

如月「お店の人はいないの？」

シェリー「今、とりこんでてね。竹林ちゃん。一之進ちゃんきたわよー」

如月がセンターのテーブルに座る。

小和「如月さん、次の新作はいつなんですか？」

如月「来月にはでるんじゃないかしら」

小和「絶対に買います！」

如月「ありがとうございます」

下手から竹林と環が登場。

竹林「いらっしやいませシェリーさん」

シェリー「どうも」

竹林「一之進さん」

如月「ごきげんよう。アールグレイティを」

竹林「わかたよ」

環「あの、女性なのに一之進っていうんですか？」

小和「一之進はペンネームよ」

環「ペンネームということは作家さんなんですか？」

小和「この人は大人気のラノベ作家、如月一之進様よ！」

環「えー！如月一之進ってアニメにもなった転生したら腐った死体だった件の原作者じ

やないですか！」

陽人「その話大丈夫？」

環「知らないんですか？ちよー有名ですよ！まさか、女性だったなんて」

竹林「上原、客に失礼よ」

環「あ！すみません。今日からここで働いてます上原環です」

如月「よろしくね」

環「はい！」

竹林「上原、青葉にアールグレイ」

環「はい！」

環、下手に退場。入れ替わりでカップを持った岬が登場。

岬「(如月に) あ！いらっしやいませ」

如月「ごきげんよう」

岬「加藤さん、お待たせしました」

陽人「(岬の手を握り)辛かったね・・・」

岬「え？」

薫「え！泣いてんの？」

陽人「泣いてなんかないやい！」

陽人が上手に退場。

岬「あ！お金！」

岬が上手に退場。

竹林「シェリーさんちよつと時間かかるよ」

シェリー「25杯だから仕方ないわね」

竹林「一人で飲むのか？」

シェリー「ぶん殴るわよ」

竹林「まてるよ」

竹林が下手に退場。照明が変化してそれぞれが退場。閉店の時間。岬が机を拭いている。下手から竹林が登場。

竹林「四月一日、お疲れ」

岬「店長。お疲れ様です」

竹林「大丈夫か？」

岬「はい！ご心配おかけしてすみません」

竹林「まだ1週間だろ？」

岬「はい・・・あの！ちゃんと、閉めの作業やっておくので」

竹林「今日は私がやっておくから・・・」

岬「何かしてないと・・・ダメなんです・・・」

竹林「わかたよ・・・ちゃんと家に帰って休むよろし」

岬「ありがとうございます」

竹林、上手に退場。岬がしばらく机を拭いているが下手のテーブルにへたり込む。

岬「涼太・・・」

上手からようちゃんが登場。

岬「あ！すみません、もう閉店なんです」

よう「みつけたで〜」

岬「あなたはこの前の！」

よう「契約の話、考えてくれたか？」

岬「け、警察を呼びますよ！」

よう「かまへんで。わしが食い殺したるわ」

岬がスマホで電話をかけようとする。

よう「よっ!」

ようちゃんが手をかざすと岬が動けなくなる。

岬「え・・・なに、これ・・・」

よう「これがわしの力や」

ようちゃんが手をおろすと岬が自由になる。

岬「・・・本当に、妖怪・・・」

よう「まあおちつきーな。どうせ自殺しようとしてたんや、その魂をくれるだけで、願いをなんでも一つだけ叶えたらろっちゅーねん」

岬「願いを・・・」

よう「そや。お得な話やる?」

上手の扉が開く。

岬「え・・・」

下手の扉からかんちゃんが登場。

かん「こちらです」

よう「それなんの意味があんねん! つてまーたお前か」

かん「あなたはルール違反ギリギリなことが多いから、監視ですよ」

岬「あ! あなたは昼間の!」

かん「覚えてくれていて光栄です」

岬「どうやって入ったんですか・・・」

かん「そんなことより、あなた、ちゃんと話をしないとルール違反ですよ」

よう「(舌打ちして) 今から話すとこやったんや」

岬「あなた達はなんなんですか・・・」

よう「だからわしは妖怪やってなんべんも言うてるやろ」

かん「私は死神です。宇宙のルールの番人です」

岬「妖怪に死神って・・・」

かん「信じられないのもわかります。ええわかりますとも。しかし、重要なのはそこではありません! あなたが今直面している事柄こそが重要なのです!」

よう「その芝居がかったのやめえ」

かん「お嬢さんは今、この妖怪に魂と引き換えに願いを叶えてもらうという契約を持ちかけられましたね？」

岬がほうけている。

かん「ちよつと！しつかりして！ほうけている場合じゃありませんよ！」

かんちゃんが岬をゆすぶる。

よう「首ががつくんがつくんなってるで」

かん「今からがいいところなんですから！」

よう「ええとこてなんやねん」

かん「ほーら！」

かんちゃんが岬をびんたする。

よう「いや、やりすぎやろ」

岬「あ、はい・・・」

かん「魂を引き渡すと、こいつら妖怪は食ってしまうのです」

よう「人の魂はめっちゃ旨いからな」

かん「妖怪に魂を食われてしまうと、その魂は消滅してしまい輪廻の輪から外れてしまうのです。すなわち、生まれ変わることもなくこの世から消えてしまうのです」

岬「消える？」

かん「そうです。それでも叶えてほしい願いがあるのなら私には止める権利はありません。

私は宇宙のルールの番人！何事にも干渉できないのです！」

よう「ま、そういうことや。どないする？」

岬「急にそんなことを言われても・・・少し時間を・・・」

かん「わかります。わかりますよ」

よう「久々の魂やからすぐ食いたいねん。今すぐ決める」

岬「そんな・・・」

よう「ええか、契約は誰でもできるわけちゃうねん。どうせ死のうと思てたお前にとって
はチャンスやろ」

岬「でも・・・」

よう「なんかあるやろ！死ぬ前に叶えたい願い！団子をたらふく食いたいとか、羊羹を死

ぬまで食べたいとか！」

かん「どちらも捨てがたい・・・」

よう「お前が反応すな！」

岬「どんな願いでもいいの・・・？」

よう「かまへん」

かん「条件が3つ。死人を生き返らせることはできません。願いを増やせというのもダメです。そして、一度した願いを変更することはできません」

岬「どうして、私なんですか・・・」

よう「お前、昨日の夕暮れ時にビルの屋上に立ってたやろ？」

岬「はい」

よう「夕暮れは逢魔が時ちゆうてな。あの世とこの世が繋がる時間。妖怪や幽霊と出会う時間なんや。そんな時にたまたま自殺しようとしとるお前を見つけたんや」

岬「・・・」

よう「さあ！願いを言え！」

かん「強要はダメ！絶対！」

よう「うっさい！」

岬「涼太に・・・涼太にもう一度会いたい！涼太と話をしたい！涼太と一緒に時間を過ごしたい！」

よう「ほう」

岬「でも、死んだ人は生き返らせられないんだよね」

よう「死人を蘇らせるのは無理や、でも会わせることはできるで」

岬「本当に？」

よう「ああ。その涼太いうやつのお前の前に連れてくるんや」

岬「涼太・・・」

よう「2日間や」

岬「え・・・」

よう「2日間、その涼太いうやつをお前の前に連れてきたろ」

かん「ちよつとちよつと、それはルール・・・」

よう「そういう契約や」

かん「あなたも本当にいいんですか？死んでしまうんですよ！」

岬「お願い。涼太に会わせて」

よう「よつしゃ！ちよつとじつとしとけよ」

よう「ちよつとじつとしとけよ」

よう「ちよつとじつとしとけよ」

よう「印！」

不思議な音なる。

よう「これで契約成立や！」

厳かな音楽が流れる。

岬「涼太・・・」

上手の扉が開く。下手から涼太が登場。

涼太「岬！」

よう「お前もかいつ！何それ流行ってんの？」

岬「涼太！」

溶暗。

2場

岬の部屋。中央にテーブルが置いてある。センター後ろのテーブルには布がかかっている。明転するとテーブル下手側に涼太が座っていて、上手側にかんちやんとようちゃんが座っている。岬が上手奥に立っている。テレビの音が聞こえる。

岬「なんで？ねえなんでなの？」

よう「何が？」

岬「なんであんた達もいるのよ！」

よう「しゃーないやん。わしはお前と契約したんやもん。憑りついてる様なもんやもん」

かん「私はこやつの監視役ですから」

よう「この番組めっちゃおもしろいな！」

岬「折角、涼太と二人の時間を過ごせると思ったのに！」

岬、テレビを消す。

よう「あ！なにすんねん！」

岬「ちよつと黙ってて！」

よう「でも、テレビを・・・」

岬「私達には2日間しか時間がないの」

よう「すんません」

涼太「岬、落ち着いて」

岬「涼太・・・本当に涼太なんだよね？」

涼太「そうだよ。ま、幽霊だけどね」

岬「幽霊でも、また会えてうれしい」

涼太「僕もだよ岬・・・あの、あまり見ないでもらえますか？」

よう「だってテレビ消されてんもん」

かん「私たちはいないものと思ってもらって」
岬「いるじゃん！」
涼太「そういえば二人のことはなんて呼べばいいんですか？」
よう「好きによんだらええ」
涼太「名前とかはないんですか？」
よう「妖怪に名前なんかないよ」
かん「私は宇宙のルールの番人ですから」
涼太「でも、それだと困るね」
岬「困らないわよ。だって呼ぶことないもん」
よう「お前なあちよつとは俺に感謝せえよ！幽霊のそいつをちゃんと触れるようにもしてやってんから」
岬「私だって自分のたま・・・」
涼太「どうしたの？」
岬「たま、たま、たま・・・ねぎ」
涼太「岬のたまねぎ？」
かん「ルールぎりぎりですけどね」
よう「かたいこというなや」
かん「私もこの契約には少し興味があるのでいいですけど」
涼太「じゃー二人の呼び名を決めてあげようよ」
よう「余計な事せんでええから」
涼太「でも、二人は周りからは見えるんですよね？」
よう「そうや」
涼太「人前で呼ぶときに妖怪さんとか死神さんとか呼んだら周りはドン引きだよ」
岬「じゃー私が決めてあげる！」
よう「嫌な予感しかせえへんねんけど」
岬「あ！ようちゃん！」
よう「なんでなん？」
岬「妖怪だから」
よう「安易」
岬「あなたはかんちゃん」
かん「なぜに？」
岬「二人あわせると」
よう「よう」
かん「かん」
よう「しようもなっ！」
岬「団子とか羊羹っていったから」
かん「気に入りました」
よう「まじで！」

岬「だん」と『』でもいいわよ」

よう「ようかんでお願いします」

涼太「妖怪って人間を襲って食べたとかもつと怖いものだと思ってました」

よう「ああそれな。今はあかんねん」

涼太「今は？」

かん「昔は妖怪に対抗する手段を持った人間も多かったですですが文明が進むにつれてそう

いった力も弱くなっていったんです」

涼太「そうなんですネ」

かん「こいつら妖怪は節操がないから放っておいたら人間を食べつくしちゃう。というこ

とでルールができたんです」

涼太「ルールを破るとどうなるんですか？」

かんちゃんが鎌を出す。

涼太「それは？」

かん「いやだなあ。死神の鎌ですよ」

涼太「小っさ！」

かんちゃんが鎌を涼太にあてる。

涼太「あくなんだか天に上る気分」

鎌を離す。

涼太「(息を切らせて) 成仏しかけました」

かん「この鎌は妖怪にも有効です」

かんちゃんがようちゃんに鎌をあてる。

よう「あく天にも・・・やめいっ！」

かん「人に使うと」

かんちゃんが岬に鎌をあてると岬の意識がなくなる。

涼太「岬！」

かんちゃんが鎌を離すと岬の意識が戻る。

岬「お花畑がみえた！」

かん「という風にルールを破るとこの鎌で強制消滅です。ま、妖怪は時間が立てば復活するんですけどね」

よう「ねらい目は成仏できずにおる魂やな。そういうやつは大抵この世に未練があるから契約しやすい」

涼太「もしその契約した人がこの世界を征服したいとかいったらそれもかなうんですか？」

かん「願いを叶えるといってもその妖怪の力以上のことはできませんから」

よう「わしくらいの大妖怪でも魂を触れるようにするのは二日が限界や」

涼太「岬はようさんと契約したんだよね？」

岬「そうだよ」

涼太「ようさんに何を渡すの？」

岬「えっ！たまねぎよ！」

涼太「たまねぎ？たまねぎで僕を岬の前に連れてきてくれたんですか？」

岬「特別なたまねぎなのよ。ね！」

よう「はい。そうです」

岬「そんなことより、もつと私と話しようよ！」

涼太「ごめん、ごめん。あの、最後にひとつだけ」

かん「なんででしょう？」

涼太「僕はいつ消えるんですか？」

岬「涼太・・・」

かん「明後日の夕暮れですね」

涼太「そうですか・・・」

岬「涼太！明日は私、休みだから遊びにいこ！」

涼太「岬・・・そうだね！どこにいききたい？」

岬「遊園地！あ！映画とかもいいなあ。涼太は？」

よう「お台場」

かん「六本木」

岬「勝手にいけば？」

よう「そうっすよね」

涼太「よし！じゃー全部いこう！」

照明変化。ようちゃんとかんちゃんテーブルを移動。町の雑踏がはいる。

よう「あの蔦屋って何屋？」

涼太「レンタルビデオ屋さんです」

かん「吉野さんの家がいっぱいあるんですね」

涼太「あれは牛井屋さんです」

岬「こうなるとは思ってたけど、もうちょっと自重してくれないかな？」

涼太「まあまあ岬。大勢で楽しいよ」

岬「涼太」

よう「お前は話がわかるなあ」

ようちゃん、かんちゃん、涼太が笑っている。

岬「もう!」

涼太「岬!次は映画にいきましょう!」

岬「うん!」

照明変化。

よう「(泣きながら)めっちゃええ映画やったなあ」

かん「最後、主人公が・・・あんな・・・(号泣)」

涼太「(泣きながら)わかります」

よう「あれ、お前全然泣いてないやん」

岬「ようちゃんとかんちゃんが途中で大声で泣きはじめるから集中できなかったのよ!」

よう「お前・・・あんたの彼女、人の心もってないでえ」

岬「妖怪に言われたくないわよ!」

よう「あれ見て感動せんとか・・・ちゃんと生きろよ」

岬「かんちゃん、こいつを今すぐ消滅させて!」

ラインの着信音が鳴る。岬がスマホを見る。下手に薫が登場。

岬「薫からだ」

岬がスマホに出る。

薫「岬先輩!今、大丈夫ですか?」

岬「大丈夫。どうしたの?」

竹林、青葉、環、小和、シェリーで軽食やグラスを持ち込む。

薫「あの、みんなでパーティーしようって。今日の20時にトワイライトまできてください
い!」

岬「え!いや・・・」

薫「待ってますね!」

薫がスマホを切る。

涼太「どうしたの？」

岬「後輩が今夜パーティーをやるんだって・・・」

涼太「行こうよ！」

岬「でも・・・」

涼太「僕も岬がお世話になっている人に会ってみたいな」

岬「涼太・・・」

よう「あかんあかん、そいつには人の心がないからな」

岬「かんちゃん。鎌」

かん「え！」

岬「か・ま！」

かん「はい！」

岬がかんちゃんから鎌をうけとる。上手から如月が登場。

如月「あら？岬さん。ごきげん・・・かま？」

岬「如月さん」

如月「偶然ね」

岬「あ！こちら、うちのカフェの常連さんで如月一之進さん」

涼太「前に話してくれた、作家の」

岬「そうそう」

涼太「初めまして」

如月「岬さんのお友達？」

岬「は、はい」

如月「(全員を見て)変わったお友達ね」

よう「お前・・・」

如月「何かしら？」

よう「けったいな恰好しとるな」

如月「ほほほ。あなたに言われたくはないわ」

二人、笑いあっている。

岬「如月さん、すみません！」

如月「いいのよ。じゃーパーティーでね」

岬「はい！」

如月が下手に退場。

涼太「岬！パーティーの時間まで岬のプレゼントを見にいこうよ」

岬「涼太・・・」

よう「お前、金持ってるの？」

涼太「あ・・・ないですね」

岬「涼太が選んで！私を買うから」

涼太「うん！行こう！」

涼太が手を出す。岬がそれを見つめている。

岬「うん！」

よう「かんちゃん！行こう！」

ようちゃんが手を出す。かんちゃんがそれを見つめて。

かん「うん！」

ようちゃんとかんちゃんが岬を見ている。

よう「やばっ！」

ようちゃんとかんちゃんが上手に退場！

岬「まてー！」

岬と涼太が上手に退場。照明変化。20時のトワイライト。それぞれが岬が来るのを待っている。下手のテーブルに環とシェリーが座っている。

小和「岬先輩来るかな？」

青葉「来ると思いますよ」

竹林「そうね」

薫「来てもらわないと困る」

小和「あんた何企んでるの？」

薫「まあまあいいじゃん」

青葉「店長、お酒、もう少しあったほうがいいですか？」

竹林「そうね。買い出しいけ」

環「え！そうなんですか！」

薫「なに？どうしたの？」

環「シェリーさん、靈感があるんだって！」

シェリー「ちょっとだけね」

青葉「見えたりするんですか？」

シェリー「見えたりはしないんだけど、なんとなくわかるの」

環「じゃー占いとかもできるんですか？」

シェリー「ちょっとだけね」

環「私、あんまりいい恋愛経験がなくて・・・これからうまくいきますか？」

シェリー「過去は変えられないの。つらい過去なんて忘れて今を大事にしなさい」

環「はい！あの・・・好きな人ができたんですけどどうまくいくか占ってください！」

シェリー「そんなの占うまでもないわ」

環「どういうことですか？」

シェリー「人生、当たって砕けろよ！」

環「なるほど！」

竹林「シェリーさん、あまり調子に乗せないでくださいね」

上手から如月が登場。

薫「岬先輩！なんだ如月さんか〜」

如月「来ない方がよかったかしら？」

小和「そんなことないです！こちらへ！」

如月「どうも」

上手から陽人が登場。

陽人「遅くなりました！」

青葉「加藤さんか〜」

陽人「あれ？前田さんに呼ばれたんだけど、来ないほうがよかった？」

薫「いいのいいの」

陽人「これは何をしてるんです？」

薫「岬先輩、最近元気なかったでしょ？」

陽人「うん」

薫「それを元気づけるためのパーティーよ」

陽人「それはいいですね！」

薫「はい。これ」

薫が請求書をだす。

陽人「なにこれ？」

薫「パーティーの請求書」

陽人「7万！」

竹林「貸し切りね」

陽人「僕が払うの？」

薫「加藤さんが主催したってことにすれば加藤さんの株もあがるわよ」

陽人「でも……」

薫「そしたら、岬先輩も。加藤さん……好き！って」

陽人「あの……僕、すでに一度、岬さんにフラれてるんだ」

全員、驚き。

薫「パーティー楽しみましょ！」

全員「いやいや」

陽人「でも、岬さんが元気になるならパーティーやりましょ！」

薫「そうこなくっちゃ！」

小和「あんた、騒ぎたいだけでしょ」

薫「違うわよ」

環「加藤さん……」

シェリー「なるほど」

薫「ほら、前は彼氏がいたから断られただけで、今ならいけるんじゃない？」

陽人「いや、でも……」

竹林「今はダメ」

青葉「そうですね」

薫「二人も事情を知ってるんですか？」

青葉「ええ」

竹林「知てるよ」

如月「岬さんに何かあったの？」

青葉「店長……」

竹林「みなさん、四月一日のためにきてくれたね……ありがとうございます」

青葉「1週間前に岬の彼氏が事故でなくなっただけです」

薫「だからパーティーでもやって励まそうと思っただけ」

如月「そうだったの……でも、今日のお昼に偶然岬さんにお会いしたけど、元気そうだったわよ」

竹林「そうか……やはり元気か……え？」

如月「男性3人と映画館の前について……そうそう、3人とも泣いていたわよ」

青葉「どういう状況ですか？」

如月「詳しくはわからないけど……」

小和「ひよっとして……」

薫「かあー！岬先輩もやりてですね。もう男を3人もフルなんて」

陽人「え！そうなの？」

シェリー「岬ちゃんに彼氏がなくなったんなら告白されてもおかしくないわねえ」

環「それって酷くないですか？」

竹林「どうして？」

環「だって彼氏さんが亡くなってまだ一週間しかたっていないのに、もう別の男の人と遊びにいつてるなんて。しかも、3人同時に！」

青葉「何か事情があるのかもしれないし」

環「そんなの加藤さんが可哀想です」

陽人「え？ぼく？」

環「だって四月一日さんは加藤さんの気持ちを知ってるんですよ？」

竹林「一度フラてるからね」

青葉「店長」

竹林「なに？あ！ごめん、ごめん」

陽人「いえ。僕は、岬さんが元気になってくれればそれでいいので……」

環「シェリーさん」

シェリー「なあに？」

環「あたって碎けるですよね？」

シェリー「え？あ！今じゃないわよ……」

環「加藤さん！私、加藤さんの事が好きです」

一同驚き。

如月「面白くなってきたわねえ」

陽人「ちよちよちよちよつと待って！だって、僕達、出会ったの昨日だよ！」

環「好きになるのに時間は関係ありません」

陽人「ほら、お互いのことよく知らないし……」

環「これから知っていけばいいんです！」

陽人「それに僕、車酔いするし……」

シェリー「それ今関係ない」

陽人「なんていうか……その……」

環「四月一日さんの事、まだ好きなんですか？」

陽人「……うん」

環「……わかりました」

環が上手に退場。

青葉「あ！上原さん！店長！」

店長「任せて。上原さん、まだバイト中だから！」

竹林、上手に退場。

青葉「そうじゃないです！もう・・・」

如月「なんだかごめんなさい。変な空気にしちゃって」

青葉「気にしないでください。如月さんのせいじゃないので」

小和「あの、パーティーどうします？」

陽人「やろうよ！」

青葉「加藤さん・・・」

陽人「せっかく用意したんだし！それに、岬さん、本当は辛いからそれを忘れようとして
いるのかもしれない」

シェリー「そうね。あんた、いい男じゃない」

陽人「いえ」

シェリー「今度、うちに遊びにいらっしやい」

陽人「それは辞めておきます」

シェリー「そのうち、あんたから来たいっていうようになるわよ」

陽人「怖いんですけど」

薫「それに、今キャンセルしても7万はかかるしね！」

陽人「忘れてた〜」

青葉「岬、彼氏が亡くなってそうとう辛かったんだと思います・・・」

陽人「その彼氏さんってどんな方だったんですか？」

青葉「私は一度だけしか会ったことはないんですけど、優しそうな人でした」

上手から岬、涼太、ようちゃん、かんちゃんが登場。岬の首にはネックレスが
かかっている。

岬「お待たせしました！」

陽人「岬さん！」

涼太「失礼します」

青葉「そう！ちょうどあの人みたいな感じの・・・あの人です！」

全員驚く。

岬「みなさん、どうしたんですか・・・」

青葉「岬！彼氏、死んだんじゃないの？」

岬「え！そ、そうだよ」

青葉「その人は？」

岬「え！青葉、会ったことあったっけ？」

青葉「前に二人で早番だった時に一回だけ店に来たじゃない」

岬「・・・あ！」

よう「忘れてたんかい」

青葉「どういうこと？」

岬「えっと、これは・・・」

涼太「ぼ、僕は涼太の双子の弟でりりりりり涼平っていいいます！」

全員、動きが止まる。涼太にサス。

涼太の心の声「無理があるかー！」

岬にサス。

岬の心の声「ベタすぎるわ。涼太！」

ようちゃんとかんちゃんにサス。

かんちゃんの心の声「マツモトキヨシって！」

ようちゃんの声「だれー！ー」

照明が戻る。

青葉「なーんだ。びっくりしたー。双子なら似てるわよね」

涼太「いけた！」

青葉「いけた？」

涼太「いえ、なんでもないです」

岬「そ、そうなの。双子の兄なのよ！」

青葉「今、弟って・・・」

岬「天国の彼氏がね。兄だから、こっちは弟」

小和「あ！ひよっとして一之進様が会った3人って」

如月「この人達よ」

岬「どうかしましたか？」

青葉「岬がその3人をふって泣かしてたって」

岬「え！違います！映画を見て泣いていたんです！」

シェリー「隠さなくてもいいのよ」

岬「隠してません！」

涼太「本当です！あ、兄が亡くなって岬さんが落ち込んでいたのでみんなで映画でもどう
ですかって僕が誘ったんです」

よう「そやそや、なんでわしがこいつにふられなあかんねん」

かん「あの、飲み物もらえませんか？」

岬「ちよっと黙ってて！」

如月「そうだったのね」

岬「はい」

小和「もう！薫がはやとちりするから」

薫「あんただって、ひよっとして！っていつてたじゃない」

小和「だってー・・・」

如月「それで、そのお二人はどういったご関係？」

岬「え・・・」

よう「任せとけ」

岬「ちよっと！」

よう「ようです」

かん「かんです」

よう「二人合わせて」

よう・かん「ようかんです」

如月「それで？」

よう「くそ、あの女やるな」

かん「こんなにダメージがあるなんて」

涼太「僕の大学時代の友人なんです」

如月「一人だいぶ年齢が上だけど」

涼太「ね！」

青葉「と、とにかく、岬が来たことだしパーティー始めましょう！」

陽人「そうですね！」

岬「あの、今日はなんのパーティーなんですか？」

青葉「みなさん、岬が落ち込んでるから元気になってもらおうって集まってくれたのよ」

岬「みなさん・・・」

薫「ちなみに加藤さんのおごりです。ね」

陽人「え、ええ！」

岬「加藤さん。すみません」

陽人「いえ・・・」

薫「加藤さん。乾杯」

陽人「はい。では、みなさん、グラスを！」

全員グラスを持つ。

加藤「かんぱーい！」

全員が乾杯の声。

シェリー「(岬をジロジロ見て) んん〜」

岬「ど、どうかしました?」

シェリー「ちよつとこっちきて」

岬「はい」

岬がシェリーの元へ行く。

シェリー「あなた、なんだかよくないものに憑りつかれてるかも」

岬「え!」

青葉「シェリーさん、靈感があるんだって」

シェリー「ちよつとだけね」

岬「き、気のせいじゃないですか?」

シェリー「私が払ってあげるわ。青葉ちゃん曲かけて」

青葉「曲ですか?」

シェリー「そう。なんでもいいわよ」

青葉「わかりました」

青葉が下手にはける。

岬「あの・・・」

シェリー「黙って!集中するから」

岬「はい・・・」

岬が涼太の元へいく。

岬「大丈夫なの?」

かん「まあ多少の力はあるようですが問題ないです」

よう「わしはあんなやつに払われたりせんよ」

岬「ならいいけど・・・」

青葉が下手から登場。リモコンを持っている。

青葉「音楽かけますよ」

シェリーがセンターに移動。

シェリー「いいわよ！」

青葉がリモコンを操作すると曲が流れる。シェリーがセンターで踊りだす。

よう「な、大丈夫やろ？」

涼太が成仏しかける。

涼太「あああああああ……」

岬「涼太？」

よう「こいつが成仏しかけるとるな」

岬「ストップ！」

岬が青葉からリモコンを取り上げて曲を止める。

シェリー「なあに？いいところだったのに」

涼太「やばかった……」

岬「あ、あくなんだか体がかるくなりました。ありがとうございます」

シェリー「では、もう一曲」

岬「シェリーさん！また、次の機会に」

シェリー「そう？わかったわ」

上手から竹林が登場。手にコンビニの袋を持っている。

竹林「もどたよ。四月一日！はい、追加のお酒」

青葉が受け取る。

青葉「店长、上原さんは？」

竹林「上原？……ああ！上原を探してたね。買い出し思い出した、何か忘れた。上原だ

たね」

青葉「なんで？」

竹林「こつちが聞きたいよ。上原、探してくる」

竹林が上手に退場。

岬「上原さんがどうかしたの？」

青葉「岬はいいの気にしないで！ほら、パーティー楽しんで！」

岬「う、うん」

如月「ねえ。あなた達のお住まいはどちらなの？」

よう「わしらはこいつの家におる」

岬「ちよっと！」

全員、驚き。

青葉「二人で？」

よう「いや、こいつもいれて3人や」

全員絶句。

よう「どないしたん？」

岬「違います！ちよっと変なこといわないですよ！」

よう「ほんまのことやんけ」

涼太「こいつ、こういう冗談が好きなんですよ」

よう「だから・・・」

岬「黙ってて！」

よう「なんやねん」

小和「なんだ、冗談か・・・」

青葉「だよね」

静かになる。

如月「ねえあなた」

かん「私ですか？」

如月「何か面白いことやってくださらない？」

かん「むちゃぶりだなあ」

如月「こういう場なんだから。ほら」

かん「わかりました」

岬「大丈夫なの？」

かん「任せてください。すみません、テーブルをこちらに」

薫「私が」

薫がテーブルを動かす。かんちゃんがマジックをやる。みんな口々にすごいな
どの声。上手から環と竹林が登場。

竹林「じゃーん！上原みつけたよ」

青葉「上原さん・・・」

環が下手に退場。

如月「そういうじゃなくて。面白いのいかしら？」
かん「お、おもしろいの。では、モノマネを！」

下手から着替えた環が登場。

陽人「あの、上原さん。勘違いなんだよ」

青葉「そうなの！3人は映画を見て泣いてたんだって」

環「そうですか」

陽人「僕は大丈夫だから」

環「四月一日さん。そのネックレスどうしたんですか？」

岬「え・・・これはその」

環「昨日はしていなかったですよ？」

よう「そのネックレスな。こいつがこうたるわ！っていいよってんだけど、金持ってなくて、結局こいつが選んで、そいつが自腹でこうてねん。笑かしよるやろ」

陽人「そうなんだ・・・」

環「やっぱり・・・」

薫「え・・・泣いてます？」

陽人「泣いてます！」

陽人が上手に退場。

岬「加藤さん！」

環「加藤さんが可哀想です。加藤さん！」

環が上手に退場。

岬「上原さん！」

一同何も言えない。

かん「あの、モノマネを・・・」

シェリー「はいはい。今日はこれでお開きにしましょう」

竹林「そうですね」

かん「モノマネ・・・」

如月「空気読んで」
かん「ええ！」

暗転。ブルー転換。

明転すると岬の部屋。岬と涼太がテーブルの所に座っている。

涼太「ようさんとかんさんは？」

岬「なんか用事があるんだって」

涼太「そうなんだ」

岬「もうくなんなのよ」

涼太「ごめんね」

岬「涼太のせいじゃないわよ」

涼太「でも僕がいなければ・・・」

岬「色々、誤解されちゃったみたいだけどちゃんと話せば大丈夫だって！」

涼太「うん」

岬「それに今日一日、涼太といれてすごく楽しかったよ。余計なものついてきてたけど」

涼太「僕も楽しかった」

岬「明日も休みにしてもらったから一緒にいよ」

涼太「ありがとう」

岬「ううん」

涼太「岬、好きだよ」

岬「私も」

二人、手を取り合っている。上手のエリア明かりに変わる。ようちゃんが登場。

よう「お前かわしのエモノにちよっかいだしてんのは」

Ｚ「あら、気づいていたの？」

よう「あんな強力な妖気だしといてなにいうてんねん」

Ｚ「それに、あれは私の方が先に目をつけていたのよ」

よう「ぬかせ！お前の契約者はだれや！」

Ｚ「それを聞いてどうするの？」

よう「わしがそいつを始末したるわ」

Ｚ「それはルール違反じゃなくて？ねえ死神さん」

かんちゃんが上手から登場。

かん「ばれていましたか」

Ｚ「隠れる気もないくせに」

かん「確かに、こやつは契約ではお主の契約者に手をだせばルール違反に該当する」

ズ「ほーらね」

よう「ほなら、わしと勝負せい！」

ズ「どうして私が勝負しないといけないの？」

よう「なんやびびってんのか？」

ズ「いいわ。その挑発にのつてあげる」

笑いながらナレーションが消える。

よう「あいつの契約はどんなんやねん」

かん「私は宇宙のルールの番人。何事にも干渉しません」

よう「久々の魂や。絶対にはあきらめんからな！」

ようちゃんが上手に退場。

かん「やれやれ」

かんちゃんが上手に退場。明かりが岬の部屋に戻る。上手からようちゃんが登場。

よう「おい！明日はどこにもいくなよ」

岬「なによいきなり・・・」

よう「ええから、言うこときけ」

岬「訳を教えてよ」

よう「それは、お前・・・言われん」

岬「だったら嫌よ」

よう「兎に角や、明日は出歩くな！」

岬「いい加減にしてよ！私は涼太と二人で過ごしたいの！」

よう「契約してんねんからしゃーないやろ」

岬「さっきまでいなかったじゃない」

よう「それは用事があったからで・・・」

岬のスマホが鳴る。

岬「青葉からだ、どうしたんだろこんな夜中に・・・」

岬がスマホにでる。

青葉ナレ「岬、青葉だけど」

岬「どうしたの？うん。うん。そっか・・・わかった。うん。また、明日」
涼太「何かあったの？」

岬「上原さんが謝りたいから、明日店に来て欲しいって」

よう「いくなよ！」

岬「いい加減にして」

涼太「岬」

よう「だから・・・」

岬「私たちの前から消えて！」

よう「勝手なことを・・・」

岬「早く！」

よう「くそ！」

ようちゃんが上手に退場。暗転。明かりがはいると次の日のトワイライト。

センターのテーブルに岬と涼太が下手のテーブルにようちゃんとかんちゃんが座っている。その傍らに竹林が立っている。

竹林「いらつしやい」

岬「コーヒーを二つ」

竹林「メキシコのいい粉が手にはいたよ」

岬「店長、それだと犯罪の臭いがします」

竹林「あいやー」

竹林が下手に退場。かんちゃんが砂糖をずっと入れている。

岬「ねえ。なんで？なんでいるの？」

よう「なんでで、コーヒー飲みに来てるに決まってるやろ」

岬「妖怪が珈琲を飲むわけじゃないじゃない」

よう「決めつけがえぐいな」

かん「死神も飲みますよー」

岬「出てっつてよ」

かん「紅茶も好きです」

よう「黙っとけ！」

岬「黙ってて！」

かん「はい」

よう「つってお前どんだけ砂糖いれるねん」

かん「だってこれ苦いんですもん」

岬「ほくら飲めないんじゃない」

よう「嫌やったらお前らが出て行けよ」

岬「私はようがあるのよ」

よう「わしもようがあるねん」

岬「あんたにはない！」

よう「おお！いい切ったな」

涼太「岬、落ち着いて」

岬「だって〜」

涼太「ようさん。ちょっとお話しですか？」

よう「なんやねん」

涼太「ちよつとだけ。ね。かんさんも」

よう「ちよつとだけやぞ」

涼太「岬、直ぐに戻るから。ね」

岬「うん」

涼太とようちゃんとかんちゃんが上手に退場。下手から青葉が水を2つ持って登場。

青葉「いらっしやい」

青葉が水を置く。

岬「ありがとう」

青葉「涼平さんは？」

岬「涼平？」

青葉「うん」

岬「あっ！涼平ね、涼平。ちよつと用事があるって出て行った」

青葉「あれ？二人もいない」

岬「帰ったみたいよ」

青葉「お金っ！ねえ。涼平さんと付き合うの？」

岬が水を吐き出す。

青葉「ちよつと！」

青葉がテーブルを拭く。

岬「つ、付き合わないわよ」

青葉「私はいいと思うよ」

岬「だから、付き合わないって」

青葉「昨日のパーティーの時、まあんなことになっちゃったけど。久しぶりに元気な岬をみたからさ」

岬「ごめんね・・・」

青葉「謝らなくていいわよ。岬が大変なのも知ってるから」

岬「ありがとう」

青葉「双子の兄弟だし、まだ亡くなってから1週間しかたっていないから周りの人は色々というかもしれないけど、私は岬の味方だから」

岬「青葉・・・涼太の事・・・忘れた方がいいのかな？」

青葉「うーん。岬はどうしたいの？」

岬「忘れたくない」

青葉「そっか。そうだよね」

岬「うん」

青葉「でも、それじゃー前に進めない」

岬「え・・・」

青葉「好きな人の事を忘れるか・・・難しいね」

岬「うん・・・」

青葉「あ！加藤さんはどうするの？」

岬「今は考えられないかな・・・」

青葉「一途でいい人なだけだねえ」

上手から小和と薫が登場。

青葉「いらつしやいませ！」

薫「あれ？岬先輩、今日は休みなんですか？」

岬「うん」

青葉「すぐに片付けるから」

薫「はい！カフェラテ2つ」

青葉「はーい」

青葉が下手のテーブルを加太づける。小和と薫が下手のテーブルに座る。

青葉「(岬に) ゆっくりしていいって」

岬「ありがとう。あ！青葉、上原さんは？」

青葉「もうすぐ来るんじゃないかな。何か用事？」

岬「え・・・昨日、青葉が電話で・・・」

青葉「電話？私が岬に？」

岬「うん」

青葉「してないわよ」

岬「え・・・」

薫が岬の所に来る。

薫「岬先輩！大丈夫ですか？」

岬「大丈夫よ」

薫「辛い気持ちはわかりますけど、過去の男の事は忘れて次いきましょ次！」

岬「あ、うん」

薫「青葉さんもそういってましたから！」

岬「え？」

青葉「あ、いや、言ったかなあ〜」

薫「嫌だなあ。一昨日、へこんでた私に言ってくれたじゃないですか！」

青葉「そうだったけ？」

薫「で！私は加藤さんがいいと思うんですよ」

岬「え！」

薫「青葉さんもそう思うでしょ？」

青葉「どうだろうねえ〜」

薫「あ！ひよっとして双子の弟のり、り、り・・・」

岬「涼平？」

薫「そう！その涼平さんど？」

岬「違うわよ」

薫「そうですよね。いくら似てるからって双子はないですよね」

青葉「薫さん・・・」

薫「あ！じゃー一緒にいたもう一人のエセマジシャンですか？」

岬「違うって」

薫「え！もしかしてあの変な和服のおっさんですか？」

岬「絶対に違う」

青葉「薫さん、それくらいにしておいたら？」

薫「なんか青葉さん端切れ悪いですね」

青葉「あ！私、仕事しなくちゃ〜」

上手からシェリーが登場。

シェリー「どうも〜」

青葉「いらっしやいませ」

シェリー「持ち帰りでアイスコーヒー。50個」

青葉「お腹壊しますよ」

シェリー「なんなのこの店」

青葉「冗談ですよ。ちょっと時間かかります」
シェリー「了解！」

下手から竹林が登場。

竹林「できたよー。あ、シェリーさんいらつしやい」
シェリー「どうもー」

竹林が珈琲をテーブルに置く。薫が席に戻る。

青葉「アイスコーヒー50個はいました」

竹林「死ぬよ」

シェリー「なんなのこの店！」

上手から陽人が登場。

陽人「岬さーん！あれ？今日はお休み？」

岬「はい」

陽人「そっかー」

青葉「いらつしやいませ」

竹林「いらつしやい」

青葉「注文どうします？」

陽人「持ち帰り珈琲一つ」

青葉「私が作りますね」

陽人「（あきらかにへこんで）はい」

青葉「がっかりしすぎなんですけど」

陽人「あ！すみません」

青葉「じゃー作ってきます」

竹林「メキシコの粉つかて」

青葉が下手に退場。薫が陽人に近づいて。

薫「加藤さん、今がチャンスです」

加藤「え！そうなの？」

薫「はい！」

陽人「わかった」

陽人が岬の前に行く。

陽人「あの！岬さん！」

岬「はい！」

陽人「その・・・」

＼「小和、やりなさい」

小和「はい」

薫「小和？」

小和が立ち上がる。ふらふらと岬の前に行く。

岬「どうしたの？」

＼「死ね」

小和が岬の首を絞めようとする。

薫「小和！」

陽人「岬さん！」

陽人が小和を止める。

竹林「なにしてるあるか！」

慌てて竹林がとめる。

小和「死ね！死ね！」

小和が暴れる。

陽人「大人しくしなさい！」

竹林「すごい力ね・・・」

薫も加わって、岬から小和を引き離す。

薫「小和！どうしちゃったのよ！」

シェリー「その子、悪いものに憑りつかれてるわね」

青葉が下手から登場。

青葉「どうした・・・ええ！なにこれ！」

シェリー「青葉ちゃん！曲かけて！」

青葉「え？え？」

シェリー「早く！」

青葉「は、はい！」

青葉、下手に退場。

シェリー「そのまま押さえておいてね」

竹林「まかせるよ！」

青葉がリモコンを持って登場。

青葉「シェリーさん！」

青葉が曲をかける。シェリーが躍り出すと小和が苦しみます。

シェリー「悪霊・・・退散！」

小和が気を失う。

薫「小和？小和？」

シェリー「気を失ってるだけよ」

陽人「岬さん大丈夫？」

岬「はい・・・」

竹林「これはなに？」

シェリー「さあ？」

上手から涼太、ようちやん、かんちゃんが登場。ようちやんの腰には刀がある。

涼太「岬！」

岬「涼太・・・」

涼太「大丈夫か？」

岬「うん・・・」

よう「他のやつを使ってくるとはな・・・」

上手袖中から如月の笑い声が聞こえる。如月が登場。

如月「ごきげんよう」

竹林「一之進さん」

如月「あらあら、とんだ邪魔がはいっちゃったわね」

青葉「如月さん、今はちよっと・・・」

如月の元へ行こうとする青葉をシェリーがとめる。

青葉「シェリーさん？」

シェリー「あなた、本当に一之進ちゃん？」

如月「そうよ」

シェリー「青葉ちゃん！曲！」

青葉「は、はい！」

青葉が曲をかける。

よう「おい！やめとけ！」

シェリー「悪霊退散！」

如月「えい！」

如月が跳ね返す。

シェリー「うわー！」

シェリーが倒れる。

シェリー「こんなの初めて・・・」

シェリーが気を失う。

青葉「シェリーさん！」

竹林「シェリーさん！」

薫「何がどうなってるの！」

よう「動くな！あいつは妖怪や」

一同驚く。

岬「如月さんが・・・妖怪？」

よう「そや」

岬「如月さんは作家さんで有名な人なのよ！」
竹林「そうだよ。一之進さん……」

竹林が如月に近づく。

如月「えい」

竹林「あいやー」

竹林が倒れる。

青葉「店长！」

よう「本人にきいてみたらええ」

岬「如月さん！」

如月「この子の願いは自分の書いた小説が有名になること……私はその願いを叶えてあげたの」

よう「で、そいつの魂を食うたんやろ」

如月「そうよ。絶望に満ちた魂はおいしかったわ」

岬「じゃー如月さんは？」

よう「とつくに死んだる」

岬「そんな……」

よう「しかし、死んだやつに化けるなんて悪趣味やな」

如月「この格好の方が人間に近づきやすいし色々便利なのよ。その子みたいに慕ってくれる人間も出てくるし」

岬「小和ちゃんがおかしくなったのも……」

よう「自分に好意をよせてるやつほど操りやすいからな」

岬「どうしてそんなことを……」

シエリーが目を覚ます。

シエリー「はっ！」

青葉「シエリーさん！」

シエリー「三途の川ってまあまあ深いのね」

かん「死にかけてましたね」

青葉「しつかりしてください！」

よう「あいつはお前の命を狙っとる」

岬「私を……？」

よう「誰かがあいつと契約してお前を殺して欲しいって頼んだんやろ」

岬「そんな……」

涼太「契約者は誰なんですか！」

よう「わからん。お前に恨みを持つてるやつやろ」

岬「・・・上原さん！・・・それじゃー昨日の青葉からの電話も・・・」

如月「青葉の声で」岬、青葉だけど」

青葉「え！」

如月「そろそろ、願いを叶えようかしら」

ようちゃんが如月の前に立つ。

如月「なあに？私の邪魔をするの？」

よう「わしも魂がかかっているからな」

如月「あなたじゃ私には勝てないわよ」

よう「やってみなわからんやろ。涼太！そいつを連れて逃げる！」

青葉「涼太？」

如月「逃がすと思ってる？」

よう「おい！動くなよ！ほら、行け！」

涼太「岬！みなさんも！」

薫「小和！起きて！」

青葉「店長！店長！」

薫が小和を揺ると小和が目覚める。

小和「あれ？」

薫「ほら、逃げるわよ！」

青葉「もう！」

青葉が竹林をビシタシタまくる。竹林が目覚めます！

竹林「は！」

青葉「店長！」

竹林「顔がとても痛い」

青葉「気のせいですよ！ほら、逃げますよ！」

竹林「あいやー！」

竹林が上手に退場。

青葉「店長！」

薫、小和、涼太と岬、陽人、が上手に退場。

よう「はっ！」

下手の扉から刀がでてくる。

よう「おい死神。手えだすなよ」

かん「私は死神ですよ」

かんちゃんが鎌を出す。

かん「どちらにも干渉しません」

よう「ほなら始めようかあ」

ようちゃんが刀を抜く。

如月「遊んであげるわ」

ようちゃんが如月に切りかかる。暗転。明かりが入るとビルの屋上。上手から

陽人、涼太、岬が登場。

陽人「みなさんとはぐれてしまいましたね」

涼太「岬、大丈夫か？」

岬「うん」

陽人「何がどうなっているんですか？」

岬「なんて説明したらいいか・・・巻き込んでしまっただけですごめんなさい」

涼太「あなたはここから逃げたほうがいい」

陽人「でも、岬さんを置いていけないよ」

岬「ありがとうございます。でも狙われているのは私だから。逃げてください」

上手から環が登場。

環「みなさん」

岬「上原さん・・・」

涼太「どうしてここに・・・」

環「3人が血相を変えて走ってるのをみかけたから・・・何かあったんですか？」

環が近づこうとする。

岬「近づかないで！」

環「え……」

岬「あなたなの？」

環「何がですか？」

岬「とほけないで！」

環「私は岬さんに謝りたくて」

岬「謝る？」

環「はい。昨日は失礼なことを言っておめんなさい」

岬「なにを言ってお……」

涼太「岬……違う。契約者は彼女じゃない！」

陽人が涼太たにお札をはる。

涼太「ぐわっ！」

涼太が動けなくなる。

岬「涼太！」

涼太「岬……」

陽人「おっと動かないで岬さん」

岬「え……加藤さん？」

涼太「岬……契約者はそいつだ……」

陽人「あのお札は幽霊を動けなくするんだって。妖怪がくれたんだよ便利だよね」

岬「どういうこと……」

陽人「岬さん、ここに見覚えはない？」

岬「……ここは！」

陽人「そう！思い出した？君が2日前に自殺をしようとした場所だよ」

岬「どうしてそれを……」

陽人「あの自殺はね。僕が妖怪にお願いしたんだよ」

岬「加藤さんが……」

陽人「ああでもね。岬さんにもそのつもりはあったでしょ。だから僕が妖怪に頼んでちょ

っと背中を押してあげたんだ」

岬「そんな……」

陽人「あの時死んでいればこんなに苦労しなかったのに……まさか妖怪の邪魔がはいる

なんてね」

岬「ようちゃんが？」

涼太「僕がようさんと契約したんだ……岬が幸せになれるように助けてほしいって……」

岬「それじゃあ……」

涼太「岬に心配をかけたくなかったんだ、だから、ようさんにも黙っていてもらった・・・

騙すようなことをしてごめん」

陽人「美談だねえ。でも残念。岬さんは僕の手によってここで死ぬのでした」

岬「どうしてなの加藤さん！」

陽人「君がいけないんだよ。君が僕を拒んだから」

涼太「岬を殺したって、お前のものにはならない！」

陽人「岬が誰かのものになるよりは、いいさ」

涼太「それに、お前の願いが叶えば魂を食われるんだぞ！」

陽人「岬のいないこの世に未練なんかない」

涼太「岬！」

陽人「そうだ！いいことを思いついた。岬、僕と結婚しよう。そうしたら、僕も岬を殺さないで済むし、僕の願いも叶わないから僕が妖怪に食われることもない。いい考えだろ？」

岬が涼太を見る。

岬「いや・・・」

陽人「こいつか・・・」

陽人が涼太を足蹴にする。

陽人「こいつかつ！こいつかつ！」

涼太「ぐわっ」

岬「やめて！」

陽人「なんだよ。幽霊でも痛いのかあ」

環「加藤さん！」

陽人「なーんだ。まだいたの？」

環「やめてください！」

陽人「君、僕のこと好きなんだっけ？いいよ。岬と結婚したら愛人にしてあげる」

環「加藤さん・・・」

岬「上原さん、逃げて！」

環「でも・・・」

岬「逃げて！！」

環が上手から退場。

陽人「さて、どうする？み・さ・き」

涼太「にげろ・・・」

岬「わかりました・・・」

涼太「岬！」

陽人「うるさいよ」

陽人が涼太を蹴る。

岬「やめて！」

陽人「岬。僕と結婚するんだからそいつの心配をするのはおかしいだろ？」

岬「いうことを聞きます。だから、涼太に手をださないで」

陽人「（ため息をついて）どうやらまだわかっていないようだね。そうだ！じゃーキスをし
てよ。あいつの目の前で」

涼太「岬！やめろ！僕の事はいい！僕はもう死んでいるんだ！」

岬が陽人にキスをしようとする。

岬「涼太・・・」

陽人「やめろっ！やめろ、やめろ！どうして僕をみてくれないんだ！こんなにも君を愛し
ているのに！・・・わかったよ、どうやっても君の中から彼を消すことができない
んなら・・・だったら死ね」

陽人が岬の首に手をかけようとする。

涼太「岬ーーーーー！」

暗転。明転するとトワイライト。如月、ようちゃん、かんちゃんが板付き。よ
うちゃんがかなりやられている。

よう「中々やるやないか」

如月「随分息があがってるけど？」

よう「やかましいわい」

如月「さあて。あなたと遊ぶのも飽きてきたわ。それに、私の契約者がそろそろあの子を
殺しているころじゃないかしら」

よう「なんやと！」

如月「私の契約者ね。やっぱり自分の手で殺したいんだって」

よう「そういうことか」

如月「今更気づいたの？私の役目はあなたの足止め」

よう「くそ！」

如月「じゃあね。えい」

如月が傘をふるとようちゃんが切られる。

よう「ぐわっ・・・」

ようちゃんが膝をつく。

よう「お前も俺の罨にかかったようやな」

如月「負け惜しみかしら」

よう「へへへ・・・くたばれ」

ようちゃんが倒れる。

如月「おのれ！」

如月が上手に退場。

かんちゃん「もう少し粘るかと思ったのですが、あなたも所詮この程度ですか」

ようちゃん「なんやと・・・」

かんちゃん「では、私は死んだ彼女の魂を送り届けるとしましょう」

かんちゃんが上手に退場。ようちゃんが立ち上がろうとする。

ようちゃん「くそ・・・」

ようちゃんが倒れる。暗転。

3場

明転するとビルの屋上。術の音が鳴る。

陽人「うわー！ー！」

陽人が弾き飛ばされる。

陽人「痛い！痛い！」

岬「なに・・・？」

涼太「岬・・・」

岬「涼太！」

岬が涼太の元に向けより、お札を剥がす。

涼太「ありがとう」

岬「何があつたの？」

涼太「僕がようさんと契約したときに・・・」

涼太、ようちゃんがそれぞれサス

よう「あの女に近づくのに嘘の契約をせえって？」

涼太「契約のふりをして岬を守る術か何かをかけて下さい」

よう「あいつの願いはどうすんねん」

涼太「岬は・・・僕に会いたいです。そしたら僕をみえるようにして下さい」

よう「妖怪遣いが荒いなあ」

涼太「僕の魂が欲しいんでしよう」

よう「くそ・・・」

涼太「それと・・・」

よう「まだあんのかい！」

サス戻り、ようちゃん上手に退場

涼太「岬、僕を呼んでくれてありがとう」

岬「ううん」

涼太「だから、岬は魂を食われることはないよ」

岬「でも、涼太が！」

涼太「僕はいいんだ。岬が無事なら」

上手から如月が登場。

如月「なるほど」

岬「如月さん」

陽人「おい！妖怪！助けてくれ！」

如月「うるさいわね。えい」

如月が術を使うと陽人が気を失う。

如月「そう。あなたに術をかけていたのね。えい」

岬にかかっていた術がとける。

岬「・・・ようちゃんは！」

如月「殺したわ」

上手からかんちゃんが登場。

岬「かんちゃん・・・助けて！」

かんちゃんが岬の前を通り過ぎる。

岬「かんちゃん」

かん「お忘れですか？私は宇宙のルールの番人。どちらにも干渉しません」

如月「ということらしいわ。安心して。楽に殺してあげ・る」

涼太が岬の前にでる。

如月「それは野暮つてもよ」

涼太「岬は僕が守る」

如月「その子が死ねばあなたもあの世で会えるかもしれないわよ」

岬「涼太！もういい！」

涼太「岬！生きることをあきらめるな！」

岬「涼太・・・」

涼太「今は辛いかもしれない・・・でも、生きることを・・・未来をあきらめちゃだめなんだ」

如月「あらあら、随分と無責任ね」

岬「涼太・・・」

如月「どきなさい。えい」

如月が術を使うと涼太が飛ばされる。

岬「涼太！」

如月「おやすみなさい。岬さん」

如月が傘をふりかぶる。

涼太「岬！」

術をかける音。如月の動きが止まる。上手からようちゃんが登場。

よう「まったく妖怪使いが荒いで・・・」

岬「ようちゃん・・・」

如月「えい」

如月がようちゃんの術を解く。

如月「あら、死んでいなかったのね」

よう「丈夫なんだけがとりえやからな・・・」

如月「その状態で私に勝てるの？」

よう「やってみなわからんやろうがっ！」

ようちゃんが如月に切りかかるが軽くないなされる。

岬「ようちゃん！」

よう「ちよつとしやれにならんかもな」

如月「もういいかしら？」

よう「ぼけがあ！」

ようちゃんが如月に切りかかる。如月がいなす。如月がようちゃんを切る。それを受けるようちゃん。

岬「ようちゃん！」

岬がかんちゃんの元へいき、鎌を奪う。

かん「あ！こら！」

岬がようちゃんに鎌を投げ渡す。ようちゃんが鎌で如月を刺す。

如月「こ、これは・・・」

岬「死神の鎌よ」

如月「ふふふ・・・そう・・・私が人間の小娘にしてやられるとはね・・・」

如月が消滅すると音と共に暗転。明転すると如月がいなくなっている。岬がへたり込む。

かん「これこれ、妖怪が死神の鎌を使うなんて聞いたことがありませんよ」

かんちゃんが岬から鎌をとる。

よう「お前、すげえな」

岬「怖かった・・・怖かったよ」

涼太「岬・・・」

岬「涼太！」

岬が涼太の元へ駆け寄る。

岬「大丈夫？」

涼太「なんとかね・・・」

陽人が起き上がる。

陽人「うわーーーーー」

陽人が上手に退場。

岬「加藤さんはどうなるの？」

かん「人を呪わば穴二つつていうでしょう？契約した妖怪が消滅したので、その反動が彼にふりかかるでしょう」

岬「そうですか・・・」

ようちゃん「あくしんど」

岬「ようちゃん・・・」

ようちゃん「なんや」

岬「その・・・ありがとうね」

ようちゃん「なんやきしよく悪い。頭でも打ったか？」

岬「人が素直にお礼いつてるのに！」

岬がようちゃんを叩く。照明が夕暮れになっている。

よう「痛い、痛い！」

涼太「岬」

岬「涼太・・・」

涼太「そろそろお別れだ」

よう「よっしゃ！ほならお前の魂いただこうかなあ」

涼太「はい」

岬「ちよっと待って！」

よう「なんや？」

岬「ようちゃんとの契約って、私が幸せになれるように助けてほしいんだよね？」

よう「そや。だから、ちゃんと助けたやん」

岬「私、涼太の魂が食べられちゃって生まれ変われなくなったら幸せじゃない」

よう「はあ？」

岬「だから、涼太の魂を食べないで！」

よう「いやいやいやいや、それは無理やろ」

岬「かんちゃん！」

かん「確かに、契約を果たすのでしたら岬さんを幸せにしないとね」

よう「うそーーん」

岬「めん」

よう「まじで？」

かん「はい」

よう「あかんの？」

涼太「そういうことみたいです」

よう「とんだくたびれもうけやんけ！」

かん「では、彼の魂は私が預かることにしますか」

涼太「ようさん。すみません」

よう「うっさい！ぼけかす！さっさといね！」

かん「涼太さん。いきますよ」

涼太「岬、ごめんね。幸せにしてあげられなくて」

岬「私は十分幸せだったよ」

涼太「僕は岬の側にずっといたかった・・・一緒に時間を過ごして、一緒に歳をとりたか

った・・・」

岬「私、涼太の事を忘れない」

涼太「岬・・・」

岬「でも、精一杯生きるね」

涼太「・・・幸せになってね」

岬「生まれ変わってもまた私の事を好きになってくれる？」

涼太「どんなに遠くにいてもどんなに時間がかかっても、絶対みつかるよ」

岬「涼太・・・好きだよ」

涼太「岬・・・」

照明が消えていく。

涼太ナレ「好きだよ」

暗転。

岬「涼太ーーーーー!!」

エピローグ

明かりが入ると、涼太とかんちゃんの姿がない。

よう「さあてわしもいくとするか」

岬「ようちゃん・・・ありが・・・」

よう「岬、お前また自殺したなったら俺のこと呼べよ。魂もらうから」

岬「え・・・」

よう「な」

岬「じゃーもうようちゃんと会うこともないね」

よう「そうか」

岬「うん」

上手から環、青葉、竹林、シエリー、薫、小和が登場。

青葉「岬!!」

岬「青葉! みなさん!!」

竹林「心配したよ〜」

薫「(泣きながら) 岬先輩〜〜」

ようちゃんが上手から退場。

シエリー「なんともないの?」

岬「はい」

青葉「あれ? 他の人は?」

岬「ようちゃん!!」

青葉「どうしたの?」

岬「ううん。なんでもない。その、なんて説明したらいいか・・・」

青葉「無理しなくていいわよ。岬が無事なら」

岬「青葉・・・」

小和「岬先輩、すみません」

岬「気にしないで」

環「岬さん! その・・・」

岬「上原さんがみんなを呼んでくれてくれたのね。ありがとう」

環「いえ……」

岬「上原さん……」

環「はい」

岬「辛かったね」

環が泣き出す。

シェリー「ちよつとちよつとどうしたのよ！」

竹林「青葉！」

青葉「上原さん、落ち着いて」

薫「泣きながら）岬先輩~~~~~」

小和「泣きながら）岬先輩頭~~~~~」

青葉「こつちもかっ！店長！」

竹林「あいや〜」

岬がみんなから離れる。

岬「涼太……ありがとう」

溶暗

END

[上演の連絡は shigendou@gmail.com](mailto:shigendou@gmail.com)

まひお問い合せください。